JAIR NEMSTECCER

日本国際政治学会

No. 13

October 1980

アジア・アフリカ法律諮問委員会

高橋通敏(鹿島平和研究所)

余り人に知られていない国際機関であるが、「アジア・アフリカ法律諮問委員会」というものがある。その設立は古く、1955年のバンドン会議の十原則にエンカレッジされ、1956年に設立された。現在加盟国は、アジア・アフリカの諸国のみで、36ケ国、常設の国際機関で事務局はインドのニューデリーにあり、毎年少くとも1回、本会議が加盟国の首都で廻りもちで開催される。

この委員会は極めて特異な委員会である。第一に委員会に対する各国の代表は、加盟国の政府によって任命される。それは通例の国際会議に派遣される政府代表と同一である。しかしその発言は常に発言者の個人的発言であって政府を代表するものではないとせられる。従って一つ一つ政府の訓令を求める必要はなく、自由に発言できる。私もここ数年来、政府代表に任命されているが、極めて気楽である。

第二にこの委員会は、国連の「アンシトラル」のアジア・アフリカ版ともいうべきもので、国際商取引法や商事仲裁などが議題になるほか、最近数年間は、国連の海洋法会議の問題点が多く議題として審議された。審議されたといっても、世界の国際政治の脚光を浴びている国連総会や安保理やアンクタッドの会議のように、自国の主張を押し通そうとして、けんけんがくがくの烈しい議論が行なわれるということもなく、まして、相手国を批判し非難するということもない。また多数をたのんで自国の提案を一挙に押し通そうとして、いわゆる voting victory を獲得しようとする工作もない。はじめから終りまでコンセンサンスが主体となる。私の記憶でも、投票が行なわれたことは一度もない。

ある意味で、極めて地味な、ささやかな委員会であるかもしれないが、このアジア・アフリカ法律家委員会が、はじめからコンセンサスを主体としたこと及びもっぱら「理解と説得」を中心としたことは、国際政治の核心を把握しているものであり、アジア的英知の然らしめるところではないであろうか。

ところが今年の委員会の本会議はバンドン会議25周年 を記念して4月未からジャカルタで開催されたが、委員

会の20有余年の歴史にとってはまことに異例のハプニン グがあった。開会へき頭の各国代表の基調演説において ジョルダン代表 (法務次官で,極めて好人物で私の親友 である)が烈々たるエジプト非難演説をやりだした。エ ジプト代表は蒼白となり立ちあがって、議長の注意を喚 起するが、議長には聞えない、あいにくその日は各国代 表の前にあるマイクがこわれていて機能しないのであ る。エジプト代表はすざまじく激怒して, 文字通り卓を 両手で叩いて大声をあげる。やっと議長はこれに気がつ いてジョルダン代表に注意するが、後者はきかない。非 難演説をやってしまった。エジプト代表は後日、答弁権 を行使することを明白に宣言した。それだけではなかっ た。更に、イラク代表が、後日の会議で、植民地主義反 対,シオニズム反対,外国の軍隊による占領反対等の決 議案を提出した。誰も正面切って反対できない。しかし 各国代表には困ったことになったという気色がうかがわ れる。そこで私も立ちあがって発言し、これら原則に反 対するものではないが、これは国際政治をわが委員会に もちこむものであって委員会20有余年の伝統に反する。 これらの問題は他の多くの国際会議において既にとりあ げられており、この委員会でとりあげる必要はない。も しとりあげるとせば委員会の特質が失なわれてしまうと 主張した。これが他の代表の意見でもあったと思われ る。こんな政治問題で分りきった不毛の論議をして気せ いをあげても進歩はない。委員会として、もっと他にや るべきことがあろうというのが各国代表のいつわらざる 気持であったと考えられる。イラク代表の執よう頑強な 主張にかかわらず議長裁定でイラク案は取り下げられ、 各国代表はほっとした。注目すべきはモンゴル代表が, イラク案反対の演説をしたことであった。表面上は私の 主張と同じ理由からであった。

私は現在の多くの国際会議がこの委員会のようなアプローチをすべきではないかと思っている。その意味で私はこの委員会を高く評価しているし、今後もその発展に期待したい。

研究分科会の近況

ソ連・東欧部会

西村文夫(日本国際問題研究所)

ソ連東欧分科会(東京地区)は発足以来,下記により 1979年末より4回の研究会を開催している。特に若干の 研究者の報告を中心に今後とも研究会開催を予定してい るが,先輩諸氏の積極的協力と参加を望みたい。従来と もこの研究会では日本国際政治学会々員以外の研究者も 臨時参加されており,幅広い研究交流を行っている。

第1回例会 1979年12月15日 (土)

黒川知文 (東外大・院生)

「帝政ロシヤにおける反ユダヤ主義」

第2回例会 1980年3月22日(土)

岩田賢司 (一橋大・院生)

「経済改革抗争とソ連外交」

第3回例会 1980年4月26日(土)

宮崎英隆 (東海大)

「ユーゴスラビヤの民族問題」

第4回例会 1980年6月28日 (土)

岩田賢司 (一橋大・院生)

「経済改革とソ連外交(二)」

日本外交史部会

大 畑 篤四郎(早稲田大学)

日本外交史分科会では本レター第10号に掲載した研究 活動につづき、次のような研究活動を行なっている。い ずれも1980年度の研究会である。

- 2月2日 瀬川善信(埼玉大)「在外居留民保護問題— 日露戦争のケースー」
- 4月19日 阿部 洋(国立教育研究所)「戦前における 日中間の学術文化交流と摩擦ー「対支文化事業」をめ ぐってー」
- 5月25日 麻田貞夫 (同志社大) 「戦間期の日本海軍政 策の解釈をめぐって」
- 6月21日 野村乙二朗(都立府中高校)「大正初期の日本の大陸政策の解釈について一特に北岡伸一著『日本陸軍と大陸政策』の書評を中心に一」
- 8月29日 共通テーマ:入江昭著『日米戦争』をめぐって

報告者 秦郁彦(拓殖大),大畑篤四郎(早大),有賀 貞(一橋大),入江昭(シカゴ大)

上記のうち5月の研究会は日本国際政治学会春季大会の機会に開催され、政策決定部会との合同で行なわれ

た。6月の研究会に関しては、別に野村氏の書評が「国際政治」に発表される筈である。また8月の研究会はアメリカ外交部会との合同で行なわれ、当初麻田貞夫氏の報告も行なわれる予定であったが、同氏の病気のため果されなかったのは残念であった。しかし有意義な討議が行なわれ、今後も通常の研究会ばかりでなく、多様な研究活動を行なうようにしたい。終りに、研究会の案内が転居先不明で戻ってくる例が間々みられますが移転の場合は下記に御一報されるようお願い致します。その他研究会に関する御連絡(報告希望、その他)も下記宛てにお願いします。

(東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学法学部大畑研究室)

東アジア部会

中 嶋 嶺 雄 (東京外国語大学)

東アジア分科会は,第4回定例研究会を春季研究大会 第2日午後に神戸学院大学で開催しました。今回は,当 分科会初の試みとして二人の外国人教授を報告者に迎 え,次のような報告と討論を行いました。

李承憲教授(韓国・建国大学)「70年代末期の北東 アジアをめぐる国際関係―デタント動揺期の韓半 島問題を中心として―」(日本語)

パリス・H・チャン教授(米・ペンシルヴェニア州 立大学)「アジアをめぐる米・中・ソ・日4カ国 関係とアメリカの外交政策」(英語)

李教授は70年代末期の東アジア国際体系の多極化の過程を朝鮮半島の地域的特殊性を中心に分析し、チャン教授は、主にカーター外交との関連で米中関係を中心にホットな情報(とくに米中軍事提携の問題について)をまじえて報告され両報告をめぐって熱心な討論がおこなわれました。

このように、わが国の学会の、しかも分科会に直接、 外国人研究者が報告者として参加したという試みは、当 学会でも初めてのものと思われ、多くの会員に歓迎され ましたので、今後ともこのような形式をときどき試みて ゆきたいと考えております。なお、李教授の参加にかんし しては国際交流基金よりの、チャン教授の参加にかんし てはアメリカン・センターからの御支援を賜りましたこ とを感謝しております。

◇ 関連学会のお知らせ

日本EC学会創立大会 11月8,9日 立命館大学

カナダ留学体験記

多人種国家マレーシアとASEAN

黒 柳 米 司(日本国際問題研究所)

1979年3月から80年3月までの1年間,国際交流基金の派遣計画に基きマレーシアでASEANの動向に関する調査・研究にあたる機会に恵まれた。在籍したマラヤ大学経済行政学部は親切にもエア・コンの効く――ただし、実に頻繁に故障した――研究室を提供してくれたが、資料面からいえば決して理想的とはいいがたかった。同じくASEANに関心をもつ私と同年輩のP講師は、この分野に関する限り、マラヤ大学の中央図書館より彼個人の蔵書の方が充実していると自慢したが、たしかに資料整備も研究蓄積も私の期待を下回っていたことは否定できない。しかし、この多人種国家マレーシアに滞在して、内部からASEAN諸国の相互関係を観察し考える時間を持てたことは、あれこれの不満や失望を補うに足るものであった。

周知のようにマレーシアは、イスラムを国教とする多人種構成(マレー人47%、中国人34%、インド人9%その他)の連邦国家である。極めて卑近な体験をいえば、香港製の挙法映画が上映される場合には、漢字・マレー語および英語の三カ国語の字幕がスクリーン狭しと散りばめられ、まことにわずらわしいものである。マレーシア到着直後、パスポート発給に際しマレー語の検定を課してはどうかとの論議が生じ、さなきだに手狭な移民局に非マレー系国民が連日長蛇の列をなしたことも見聞した。

問題は、文化・宗教・言語を異にする3人種間に国民的一体感を醸成するという一般課題と、マレー人=マレー語=イスラムの法的優位の確保という特定課題とが必ずしも整合的でないことである。中国人のマレー人への不信・不満は根深く、中国人学生や青年のなかには最悪の事態を迎えれば「政府に頼るよりジャングルに頼る」と危険な選択を暗示するものさえあるという。

ある意味でこのようなマレーシアの現実を地域大に投 影したのがASEANの現状ではあるまいか。結成13年 を経て共同体意識が定着したといわれるものの,加盟諸 国間の相互不信は解消されておらず,対ヴェトナム路線 でも不協和音が顕在化した(例えばシンガポールのいう 「ハノイ=ジャカルタ枢軸」論)。1979年10月末にイス ラム分離主義者を装ったフィリピン軍人がサバのフェリ ボートを乗客ごと強奪し(「サレーハ・バルー号事件」), マレーシア=フィリピン関係の礦きの石であるサバ領有 権問題の複雑さと深刻さを再確認させられた。

「多様の中の統一 | はインドネシアの国是であるが、その精神は多民族国家マレーシアにとっても広くASE AN全体にとっも妥当する。この自明でありながら至難な課題の深さと拡がりをある程度まで〈実感〉できたこと、それが1年間のマレーシア留学の貴重な――もしかすると最大の――成果だったのではあるまいか。

吉 川 元 (一橋大学大学院)

私が1978年夏から2年間、カナダのトロント大学に留学したのは、H. G. スキリング教授のもとでソ連・東欧比較共産主義を学ぶためであった。「比較共産主義」のゼミを担当されている同教授のゼミは、約15名の学生から成っていたが、それは実に国際性豊かなものであった。カナダの多民族性、スキリング教授の知名度の高さ、といった点を反映してか、ゼミ学生のは1/8 留学生で、他の2/8 はほとんどがソ連・東欧系カナダ人であった。

国際性豊かなこのゼミの一大難点は、言葉の問題であった。留学生たちがそれぞれクセのある難解な英語でまくしたてた時など、聞き手の学生はただ啞然として互いに顔を見合わせながら聞いていたものである。他方、この多民族的ゼミは、比較政治の討論にはいかんなくその利点を発揮した。アルバニアとブルガリアを除くすべてのソ連・東欧圏の国々を「代表」する学生たちは、それぞれ代表する国の資料を駆使して、またそれぞれの国における豊富な実体験を識りまぜ、まことに興味深い報告をしたものである。特に「欧州共産党大会」のシミュレーションをした時など、その演出たるや実に手の込んだもので、大会「会場」には、各国大使館から取り寄せられた資料・写真が展示され、民族衣装をまとって出席する者、2ケ国語で報告する者、といったふうに実に国際会議のリアルな雰囲気がでていた。

大学のゼミ以外には、人間関係において横のつながりの少ないのには少々不満であった。いったんゼミを離れると概して人間関係は淡泊なようで、特に酒好きの小生にとりゼミのコンパのないのは、まことに寂しい限りであった。多くの Ph. D 学生は、ほとんど学生研究室(carrel)に閉じ込もりがちで、その姿には業績中心主義の北米社会に生きる学生の厳しさがありありと感ぜられ、また Ph. D 取得にすべてをかける彼らからは幾ばくかの悲愴感が感ぜられもした。しかしその反面競争社会に生き抜くため故か、排他的性格を持ちあわせている学生も少なくなかった。

人間関係の複雑さと人の情の暖かさは表裏一体をなす ものであろうか、とつくづく考えたものである。帰国し た今、やはり住むにはたとい狭くとも日本であるとの認 識を新たにした。

◇機関誌69号『国際関係思想の展開』 (仮題)の原稿募集について

現在の西欧国家体系が、唯一の国際関係の原理であるとは考えられない。本号では、西欧国家体系を乗りこえていく可能性を検討してみたい。そこでとり上げるべき問題は、西欧国家体系と、それへの批判(リベラリズム、マルクス主義、第三世界の思想、平和研究、新国際秩序論など)、それへの近・現代日本の対応、およびそ

れと異質の体系(中華帝国、イスラム世界など)となる。 本号の特集テーマと関連した論文を2~3篇公募しま す。論文は、400字詰原稿用紙50枚以内(注をふくむ)。 論文の締切りは、1981年6月末日です。

ご投稿希望の方は、1980年12月末日までに題目と要旨 (800字程度)を下記あてにご送付ください。ご希望通り本号に掲載できますかどうかは、特集テーマ全体とのバランスを考慮して判断させていただきます。

編集責任者 初 瀬 龍 平

新 著 余 滴

『資料大系 アジア・アフリカ国際関係政治社会 史』(パピルス出版)

浦 野 起 央(日本大学)

本書を刊行するに至った私の動機は、こうである。も ともと、私はナショナリズムへの関心があり、研究生活 に入った時点でアフリカの比較政治に1つの研究上の糸 口をもったが、当時といっても1950年代末から1960年代 にかけてはまったく資料というものが入手できる状況に なく, その蒐集に始まって, 研究の成果はその蒐集の成 果に第一次的に反映されることから、資料を "読み直 す、ことに異常な関心をもち、いやたっぷりとつかり、 以来、資料に手を染めてきたというわけである。そして その20年来の帰結が今日の姿である。私が手がけたアジ ア・アフリカ資料は、必ずしも活版印刷物として刊行さ れたものではなく、タイプ打ち文書のコピーもことさら 多い。つまり、そういう形でしか発表されていないとい えるのである。公表されるべき国際条約にしても、国連 条約集に収められているのは僅か、というよりも域内の ものはまったくないに等しいといえる。

幸い、私の研究関心と執筆がその時代的要請から求められるままに、ベトナム戦争、ラオスの中立化、中東戦争、アフリカ問題、アジア・アフリカ共産主義運動、発展途上国の社会主義のイデオロギーと政策、各地域の政治動向と経済社会改革、そして第三世界のイデオロギーと諸会議の動向といったテーマに入り込んできたことから、対象地域も広がり、そしてそれぞれの時点で多くの

著作と資料集をまとめることができた。しかし、未だ内 部資料としてとどまったものも極めて多い。

元来,資料の集成とか体系化は私の研究作業上の責務とされないし、私の能力を越えるところである。研究機関に負うべきものである。しかし、それぞれ、いわばパイオニア的な作業を手がけ、とりあえず最低必要な資料を合せて御紹介してきたことで、いつの間にか、*1つの研究作業に区切りをつける』という意味でこの「大冊」の刊行となった。つまり、これまで蒐集してきた数万点のうち、ほんの一部のみをできるだけ体系的に所収し分析を加えることにした次第である。これまで資料を収めたものを十冊余出してきたが、その所収は1,000点までには到底いたっていない。そこで、これを可能な限り広げることにした。そして幸い憲法については西修君(駒沢大学教授)の協力を得ることができ、ほぼ完全なものが紹介できる。

1つの研究作業に区切りをつけるというのは、私の研究上の枠組では、1980年代以降、アジア・アフリカ世界ではこれまでの独立期の枠組をまったく変えてしまうという "変動、に突入するという理論があり、そこで新しい研究の出発点を再構築し直さなくてはならないという研究態度である。そこで、本書が胎生一過渡一安定への模索一変容一定着への展望の五つの局面(各地域の $I \sim V$ 分冊はこれに相当する)をもって、これまでの動向に整理と分析をおくことになったわけである。以後、分析に新しい視点を確立して、新しい著作を鋭意まとめたいというのが私の念願である。

「現代国際関係研究会」を発足させました。タイトルほど仰々しい研究会ではありません。要するに、国際関係を勉強している者どうしが、順番にそれぞれの勉強していることについて発表し、それを中心に意見を交換し合う機会を月1回設けようではないか、というだけのことなのです。

原則として,毎月,第4金曜日,午後6時から8時まで,月例会を開きます。会場は参議院第2別館(国会図書館と自民党本部の間にある白いビル)8階会議室です。会場の物理的スペース(最全員の声くてとくに制限を設大限50名)以外

がつき次第,御参加下さい。

なお,今後の予定は次の通りです。 10月24日 群馬大学講師 甲山員司

「ミクロネシアの非核問題をめぐって」

11月28日 国立国会図書館 本間 浩

「難民問題と日本の政策」

12月19日 武蔵工業大学助教授 志鳥学修

「第三世界への兵器輸出」

連絡は 電話 581-3111 内線3033 桜川まで

(呼びかけ人代表 木村修三)

1980年度秋季研究大会のお知らせ

時 11月1日(土), 2日(日) 日

会 場 中央大学

> 八王子市東中野742-1 電話(0426)74-2111(代表)

場 受付開始 午前9時30分

共通テーマ 「80年代の国際政治Ⅱ」

第1日(11月1日)

「日本外交史」部会(午前10時~午後0時15分) 「アメリカ政治・外交」分科会

石橋湛山の中国・朝鮮論

-1920年代を中心に-

大 沼 久 夫(法政大学大学院)

汪兆銘における対日和平のイメージ

高 橋 久 志 (上智大学大学院)

「戦後史」部会(午前10時~午後0時15分)

アメリカの対独占領政策

一L. D. クレイの軍政を中心に一

真 鍋 俊 二(関西大学)

米国の朝鮮政策, 1947-50

一介入と撤退の相剋一

小此木 政 夫(慶應義塾大学)

「政策決定」部会(午前10時~午後0時19分)

中国の対外政策と統一戦線

―計量的分析からの―視点―

星 野 英 一(成蹊大学大学院)

N S C73-4 (1950. 8. 24)

一朝鮮戦争勃発直後における

アメリカの軍事情勢判断―

伊藤皓文(防衛研修所)

食 (午後0時15分~2時) 尽

会 (午後2時~2時45分)

シンポジウム「1939年夏-第2次世界大戦勃発をめぐ

る国際政治一」(午後2時45分~6時15分)

イギリス 佐々木 雄太 (大分大学)

フランス 渡辺敬貴(慶應義塾大学大学院)

ド イ ツ 綱川 政則(東京学芸大学)

連 中西 治(創価大学)

ポーランド 松川克彦(京都産業大学)

総合司会 百瀬 宏(津田塾大学)

浜口 学(国学院大学)

懇 親 会 (午後6時15分~7時30分)

第2日(11月2日)

研究分科会大会(午前10時~午後0時15分)

「日本外交史」分科会

太平洋戦争末期における対延安政権との和平

模索 明 石 陽 至(南山大学)

「東アジア」分科会

現代中国・比較分析の視角

-J.R.タウンゼント『現代中国』

(慶應通信)を訳して一

小 島 朋 之(京都外国語大学)

朝鮮半島の情勢とアジアの国際環境

松 本 博 一(日本大学)

冷戦期における米国統合参謀本部の台湾政策

武 見 敬 三(東海大学)

アメリカにおける最近のヴェトナム戦争解釈

福 田 茂 夫(名古屋大学)

「国際統合」分科会

ヨーロッパ議会の直接選挙法の分析

金 丸 照 男(同志社大学)

西ヨーロッパ地域間国際協力

中 原 喜一郎 (東海大学)

「**トランス・ナショナル**」分科会

インドシナ難民の受入れに対する NGC の活動

一アメリカを中心として-

哲(日本大学) 佐渡友

自治体の国際交流

一横浜市の場合を例として-

石川孝樹(横浜市役所)

「平和研究」分科会

日本の平和研究の回顧

佐藤幸男(中央大学)

日本の平和研究の再検討

閣 寛 治(東京大学)

食 (午後0時15分~1時45分)

共通テーマ 80年代の国際政治(II)

「中級国家の対外行動」部会

(午後1時45分~4時30分)

中間国としてのカナダ外交の展開

馬 場 伸 也(津田塾大学)

ユーゴ外交の論理

一中級国家と新しい国際関係一

木 戸 蓊(神戸大学)

石油と外交-メキシコのばあい-

山 本 満(法政大学)

「80年代における重要イシュー」部会

(午後4時30分~6時30分)

農業食糧問題 速 水 佑次郎(東京都立大学)

Demographic Dislocation と国際政治

永 井 陽之助(東京工業大学)

資料センターめぐり

財団法人 日本国際問題研究所

石 塚 俊二郎 (専務理事)

日本国際問題研究所は、今年20周年を迎え、一層の活動拡充に努めているが、その事業は国際関係、外交問題の基礎研究、ならびに外交政策の企画立案に関する国際情勢の調査研究を中心に、外国研究機関との交流、国際シンポジウム、セミナーの開催、研究所会員に対する背景説明会、講演会、財界首脳の外交懇談会の開催、および出版刊行、会員への図書、資料提供、研究協力など多岐にわたっている。

調査研究については、日米関係、北東アジアの動向、中国内政、ソ連問題、安全保障問題、ラテンアメリカ政策、国際交流の7研究プロジェクトを進めており、別途兵器移転、軍備査察について研究グループを設けている。

また出版刊行は,月刊「国際問題」が本年4月号で,20周年記念号(第241号)となり,季刊「共産主義と国際政治」,年刊「国際年報」とともに,国際関係,外交問題の専門定期刊行物として,同分野の調査研究に貢献するよう努力している。さらに研究プロジェクトの成果は「国際研究叢書」として54年度までに32点を刊行,新書判の国際問題に関する「国際問題新書」を同じく54年度までに48点刊行した。このほか国際年報,英文白書,世界各国便覧,世界各国経済ハンドブック,「中国資料集成」全5巻,「中国共産党資料集」全12巻,「インドネシ

ア資料集」上下巻,「中国大躍進政策の展開—資料と解説」上下巻,「朝鮮問題戦後資料」全3巻および"Directory of Japanese Scholars in Soviet & East European Studies"を刊行,調査研究資料として評価を得ている。

図書・資料室は、国際政治、経済、社会などの各分野 にわたる和漢洋の文献や年鑑、新聞、雑誌を含む定期刊 行物を収集、整備し、研究所の調査研究プロジェクト、 委託調査に資するとともに会員の調査研究への活用に供 し、文献紹介を行っている。

54年度末の所蔵状況は、概数で洋書6,000冊, 和漢書7,000冊, 新聞11種, 洋雑誌123種, 中国語および朝鮮語雑誌28種, 和洋各種年鑑23種である。これとともにマイクロ・フイルム1,000巻, および新聞等切抜きファイル220冊を所蔵している。

同研究所の特記すべき所蔵資料として挙げられるのは、中国関係では、「人民日報」が1948年5月の創刊号より現在に至るまでの全紙、「光明日報」の1956年4月より現在まで、「陳誠文庫」セット、紅衛兵新聞各種、中国解放前後の諸資料多数である。

ソ連関係では、ソ連共産党機関紙「プラウダ」の1917年3月の創刊号より現在までの全紙、同機関誌「ボルシエビキ(コムニスト)」の1925年創刊号から現在までの全誌、およびコミンテルンの定期刊行物"IMRRECOR"の1921年10月の創刊号より1950年12月までの完全セットが所蔵されている。

北朝鮮関係で、労働党機関紙「労働新聞」の1955年10 月創刊号より現在までの全紙がそろっているのは貴重で ある。

なお当研究所は会員制をとっており、会員は、刊行物 の定期講読、資料閲覧、講演会出席などができる。

編集後記

ニューズレターの編集主任を御引受けしてから早くも4年近く経過し、この間13号を発行してきましたが、いよいよ本号をもって私は任務から解放されることになりました。当初は年2回の発行でしたが、後半は年4回となったためなかなか忙しく、御手伝い戴いた編集委員各位にはずい分御迷惑をおかけしました。この場をかりて厚く御礼申上げます。

本学会も今や会員1,000名を越す大きな組織となったことは御同慶の至りですが、それだけに学会執行部と会員、あるいは会員相互のコミュニケーションには充分留意しなければ、学会員の交流は年2回の研究大会だけということになりかねません。

ニューズ・レターの役割は正にこの学会のコミュニケーションの場たることにあり、われわれ一同もこの点に主眼をおいて非力ながら頑張ってきました。この間いただきました会員の皆様の御協力に心から感謝申上げるとともに、次号から編集を担当する新委員会に対しましてもよろしく御支援下さるようお願い申上げます。

本当にありがとうございました。 (松本三郎)

ニューズ・レター委員会では,会員の皆様からの ご投稿をお待ち申し上げております。

200字詰原稿用紙で、「巻頭言」(8枚)、「海外ニューズ」(6枚)、「海外留学記」(4枚)、「資料センターめぐり」(4枚)、「新著余滴」(4枚)、「会員の声」(2枚)で、横書でお願いいたします。

昭和55年10月1日 発行

日本国際政治学会 ニューズ・レター委員会

〒108 東京都港区三田 2—15—45 慶應義塾大学法学部松本三郎研究室内

発行人 細谷千博編集人 松本三郎 印刷所 梅沢印刷所